

# Web を利用した日本文化の調査と 文化圏認定基準の正当性

平澤 洋一<sup>†1</sup> 松永公博<sup>†2</sup> 鄭淑源<sup>†3</sup> 茂木 栄<sup>†4</sup>

本研究は日本文化の基層と境界線を明らかにすることを目的にし、本論文はその基礎研究をなすものである。現代方言の区画図は現在の地域文化を反映しているにすぎない。基層決定には血液型・石器分布・植物分布・人間文化層などを考慮した総合的な認定基準が必要である。

## **The Investigation of Japanese Culture through Web use and the Validity of Approved Standards for Cultural Spheres**

Yoichi HIRASAWA<sup>†1</sup> Kimihiro MATSUNAGA<sup>†2</sup> Zheng Shuyuan<sup>†3</sup> Sakae MOGI<sup>†4</sup>

The present research is to clarify the fundamental layers and the boundary lines of Japanese culture, this paper making a basis of the research. Any demarcation chart of modern dialects reflects nothing but a current regional culture. For cultural fundamental layers to be determined, a set of comprehensive approved standards that can admit of blood types, stonework distribution, vegetation distribution, human culture layers, etc. are indispensable.

### 1 はじめに

本研究は日本文化の基層と境界線を明らかにすることを目的にし、本稿では(1)日本文化の基層を論じた先行文献の視点と論拠を整理するとともに、(2)基層から現代層にいたる変化過程を探り、(3)現代における小文化圏およびその境界線を確定するための調査項目を

---

†1 城西大学 Josai University

†2 摂南大学 Setsunan University

†3 大学院 Rikkyo University

†4 國學院大學 Kokugakuin University

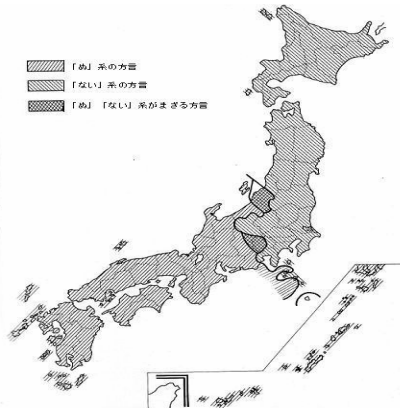


図1 ナイとンの分布 (平山 1979)

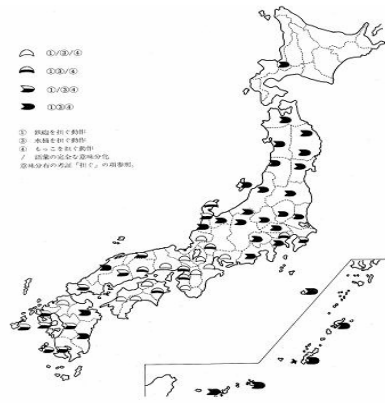


図2 「座る」の分布 (同)

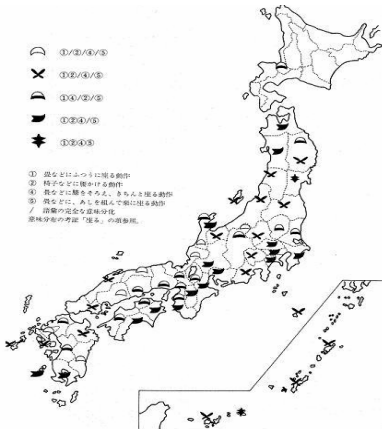


図3 「担ぐ」の分布 (同)

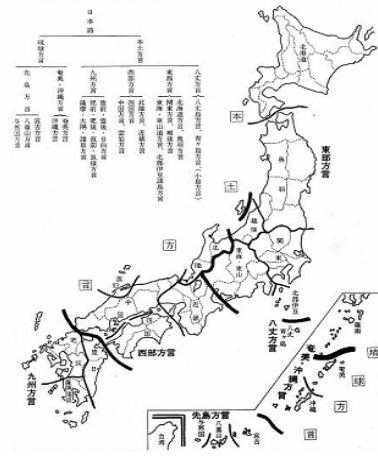


図4 日本の方言区画 (同)

提示する。現代層を対象にした調査の大半は Web 上で行い、必要に応じて臨地調査する。

本研究では、文化を「ある地域の人間が認知し分類し行動する諸様式」と定義し、文化言語文化に限定されず、ノンバーバルなしぐさ（ミミック）や行動を含み、個人の認知する文化や個別事象を個別文化、地域の基本的・普遍的な文化を普遍文化と呼ぶことにする。文化は地域の生活や方言とのかかわりが深いので、まずは方言という認定基準の有効性から検討してみよう。平山輝男 1979 ほかの方言研究<sup>(1)</sup>によれば、図1に示したナイとンは東西の文化圏に広く分布する。図2の語彙分布も東西で語形分布がきれいに分かれている。図3でも東西の対立はかなり顕著である。

20 世紀後半の方言実態を音韻・文法・語彙などの面から精査して総合的に区画したのが図4の五大方言区画（東部方言，八丈方言，西部方言，九州方言，琉球方言）である。この方言区画も各地域文化圏の実態をよく反映映してはいるものの，方言区画がそのまま地域文

化圏に重なるものではない。日本文化の基層と現代層とが同一であるという保証はない。とすれば、文化圏を厳密に確定するには、どのような認定基準をたてるべきであろうか？

## 2 日本文化の基層を探る

日本文化の基層を明らかにするため、(a)植物文化の基層と境界線、(b)古代文化の境界線、(c)人間文化の基層と境界線、(d)日本民族の基層、の4視点から検討するのが適切であるが、この点についてはすでに論述した<sup>(2)</sup>ことがあるので、議論の経過を割愛し、本稿では新し

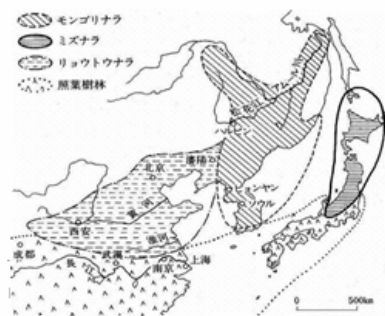


図5 ナラ林文化の分布 (佐々木 1993)

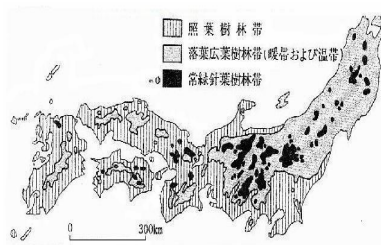


図6 森林の分布 (佐々木 1972)

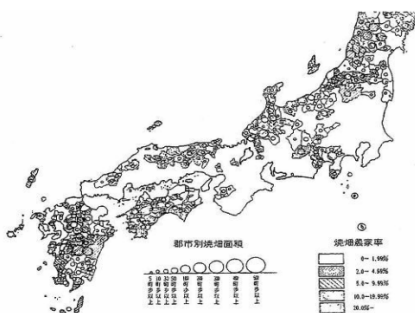


図7 日本の焼畑分布 (同)

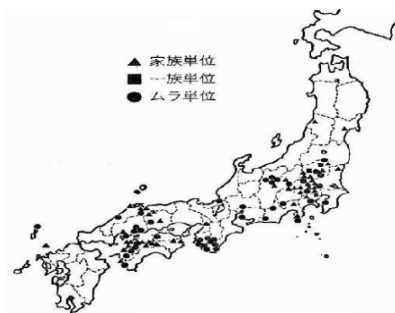


図8 餅なし正月 (坪井 1982)

い知見を加えて考察する。

(a)の植物文化の基層と境界線については、ミズナラ帯の分布が一つの重要な決め手となる。ミズナラ帯は、佐々木孝明(1993)のご研究では図5のような分布となり、北海道から中部地方の山岳部までがミズナラ帯、ハルピンと瀋陽をつなぐ線より東側でアムール川流域から朝鮮半島南まで分布するのがモンゴリナラ帯、華北一帯に広がるのがリョウトウナラ帯、中部地方山間部および富山・石川の沿岸部や南関東・東海の太平洋側から揚子江流域の南を重慶・昆明の西へと続く<sup>(3)</sup>のが照葉樹林帯である。

図6に示した日本主要部の森林の分布は、坪井(1982)が説いたように、図7の焼畑農業が残存しない地域に図8の餅なし正月の分布図をほぼ入れ込むことができ、両者は相互補完的

な分布の様相を見せる。

(b)の古代文化の境界線を解くには、a)縄文時代細石刃文化の分布、b)縄文前期の土器の分布、c)縄文中期の土器の分布、d)縄文晩期の土器の分布、e)弥生前期の土器の分布、f)焼畑農業圏の分布の6視点から考察する必要がある。地域の資料館や博物館などを対象にした出土品や民具など調査によって、かなり正確な文化境界線が描けるのではなかろうか。

佐々木孝明(1993)は、<sup>さいせきじん</sup>細石刃文化の流入は今から1万3千年前頃(旧石器時代第Ⅲ期)、縄文時代の草創期は1万2千年前であり、その縄文文化の分布は東日本のナラ林帯(落葉広葉樹林帯)に集中し、第2期は6千年前(漆など照葉樹林文化の伝来)、第3期は3千年前(稲作文化の伝来)、第4期は1,750年前(古墳時代)である<sup>(4)</sup>と説く。そのような分布は、縄文前期の土器の分布、縄文中期の土器の分布、縄文晩期の土器の分布、弥生前期の土器の分布においても大きな変化は見られないので、東西二大文化圏は縄文時代草創期にはかなり明確な勢力圏を有して対立していたと判断される。

(c)の人間文化の基層については、宮城音弥(1977)の県別データをExcelにまとめなおして多変量解析すると、躁鬱質が強い勢力をもつ地域が西日本を中心に広がり、分裂質のそれは「細石核文化圏」の分布図、さらには常緑針葉樹林帯(東日本)と照葉樹林帯(南関東・西日本)の広がり、縄文式土器文化圏(東日本)と前期弥生式土器文化圏(西日本)の分布、図1イル/オルの分布とも一致度が高い<sup>(6)</sup>。

以上のことから、日本に古くから小文化圏の分布していたことが首肯できるが、これまで提示したデータだけでは、当時の東西二大文化圏の中にどのような小文化圏が存在し、どの小文化圏が古くてどの小文化圏が新しいのか、日本文化の古層・基層はどの地域に存在していたのかを明らかににはできない。

### 3 古代層の新古関係

そこで、(d)の日本民族の基層の考察が必要になってくる。日本民族バイカル湖畔起源説を唱える松本秀雄(1992)によれば、人種の違いが識別できる血液型である「Gmab<sup>3</sup>st 遺伝子」による世界規模の調査では、日本民族は一部例外を除いて遺伝学的にまったく等質であり、これと同類の遺伝子型は図9に見るように、発祥の地と推定されるロシア・バイカル地方から中国北部・北朝鮮・韓国一帯に分布<sup>(7)</sup>し、日本もその流れにある。一部の例外とは佐渡・飛鳥(秋田)・奄美・宮古(沖縄)・石垣・与那国をいい、アイヌと佐渡の人々は一般の日本人と比べて北方型蒙古系民族の特徴である「青の ag 遺伝子」が強く、南方型蒙古系民族の特徴である「赤の afb<sup>b3</sup> 遺伝子」の影響が少ないので、一般の日本人集団よりもより古い集

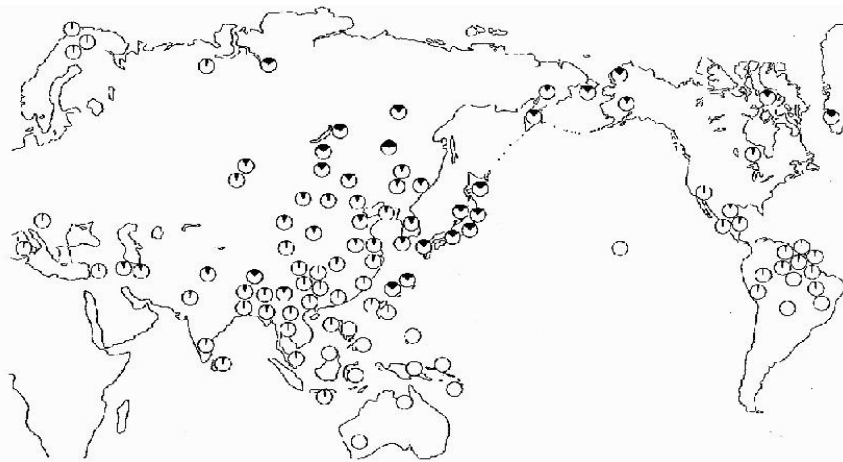


図9 Gm遺伝子の分布(松本秀雄1992)

団であり<sup>(8)</sup>、アイヌと奄美・宮古・石垣・与那国の間には等質性が見られるという。

また、北方型蒙古系民族は日本民族のほか、「北は朝鮮民族とモンゴル族、南は中国の西安と杭州の漢民族を結ぶ線が境」となり、その間に存在する漢民族は北方型蒙古系民族と南方型蒙古系民族の中間の型を示す(9)という。氏の  $Gmab^3st$  遺伝子のご研究から、i)日本民族はハイブリッド型ではなく北方系の色彩が強いこと、ii)佐渡島と宮古島が日本の中でもっとも古い地域であること、この二つの事実を我々は提示されたことになる。

田中 琢・佐原 真(1993)によれば、人類の歯は1000年で約1%ずつ大きさを減じており、

- i 縄文人の歯より、アイヌの人びとの歯は小さい。
- ii 北部九州の大陸系弥生人の歯よりも、現代の福岡・京都の人びとの歯は小さい。
- iii しかし、現代の福岡・京都の人びとの歯の方が、縄文人の歯より大きい。

とする。この結果から同書は、(A)アイヌの人びとの歯は縄文人の歯の系統をひくととらえて矛盾はない、(B)福岡・京都のひとびとは弥生人の歯の系統をひくととらえて矛盾はない、(C)しかし福岡・京都の人びとの歯は縄文人の歯からはみちびきえない、と結論づけた。

この記述と松本秀雄(1992)の記述を参考にして日本文化の基層を古い順に並べると、

- A 紀元前1万3千年頃に佐渡と宮古島に祖先たちが渡来した。これが日本最古の文化圏である。
- B 移住・伝播してミズナラ帯を中心とする縄文人文化圏を形成した。
- C 他の文化圏との接触をほとんどたないアイヌ文化圏、宮古・先島文化圏ができる。
- D 山間部などで焼畑文化圏>餅なし正月圏が形成されたか…。隼人文化圏の形成もこの頃か。
- E コメ文化とともに中国中央部からの民族が渡来し、西日本の照葉樹林帯を中心とする

弥生人文化圏を形成する。

という太い伝播経路が推定されるが、これを覆す石器類の発掘も一部報じられている（九州での発掘などの問題は稿を改めて論じたい）。

#### 4 現代層の調査

アイヌ、佐渡および宮古・先島の3文化圏の調査は、境界線の認定は容易であるが、t他の地域での調査は注意を要する。居住者が結婚・就学・生業などのために居住地をかえることは多いし、高文化圏から低文化圏への文化の伝播、時代変化にともなう内部変化などが繰り返されて今日にいたったわけであるから、日本文化の基層としての9文化圏がそのまま現代日本の小文化圏に重なって生き残っているとは考えにくい。したがって、現代の小文化圏とその正確な境界線を明らかにするには、実態調査をする以外にはない。

その実態調査では、(1)植物文化圏、(2)習俗文化圏、(3)住文化の地理的分布、(4)文化の地理的分布、(5)日本方言の境界線、(6)しぐさ・行動の地理的分布、という6分野で調査をすることで「かくれた文化」を浮き彫りにできよう。小文化圏の認定は容易ではないと予想されるが、調査を重ねながら認定基準の正当性を高めていくことである。先行文献の調査結果を参考にして作成したWeb調査項目の一部を以下に示す。

- 1 貴地域はミズナラが多いですか、照葉樹林が多いですか？
- 2 かつて焼き畑農業が行われていましたか？、あるいはそう聞いたことがありますか？
- 3 お正月にはお餅を食べる習慣がありますか？
- 4 どんなお雑煮が伝統ですか（角餅・丸餅・大きな餅・焼餅・煮た餅、餡入り、黄粉を添える、澄まし汁・胡桃汁・赤味噌汁・合せ味噌汁、鯨・小魚・イクラ・牡蠣・干し焼き海老、青菜・芋・蕪・大根・人参が入りますか）？
- 5 お正月や他の行事の儀礼食として山芋が使われますか？
- 6 貴地域のお寿司は江戸前（新鮮なネタを使ったにぎり寿司で、マグロをはじめとする赤身のネタが中心）ですか関西風（飯が六分、ネタ四分、ネタはタイなどの白身が多く、箱型の寿司）ですか？
- 7 てんぷらは「ころも揚げのてんぷら」のみを意味しますか、「さつま揚げ」もてんぷらといいますか？
- 8 ご飯を握るときは、三角型の「おにぎり」にしますか、俵形にして黒ごまなどをふりますか？
- 9 「きつね」は油揚げをのせた蕎麦・餛飩、「たぬき」は天かすの入った蕎麦・餛飩を指しますか？ それとも「きつね」は油揚げをのせた餛飩、「たぬき」は油揚げをのせた蕎麦を指しますか？

- 10 ご家庭のお醤油は、大豆と小麦をほぼ等量に使う濃口醤油ですか、それとも大豆に小麦または米を使った薄口醤油ですか？
- 11 「わたしの茶碗」「わたしの箸」という生活習慣が残っていますか？
- 12 かつて貴地域には地床（地面・土座）形式の民家がありましたか？
- 13 打消しには「ナイ」と「ン」のどちらをよく使いますか？
- 14 「人がいる」を表現する時、方言では「イル」といいますか「オル」といいますか？
- 15 「ご飯をたく」は方言では「タク」ですか「ニル」ですか？
- 16 アカイを「明るい」意味で使うことがありますか？
- 17 親指にはどんな意味がありますか（例えば親父、男）？
- 18 小指にはどんな意味がありますか（例えば子供、彼女、俺の女、末っ子、トイレに行きたい）？
- 19 目を閉じ額や眉や目を親指と人差指で擦ると、どんな意味になりますか？
- 20 話し手が話をしながら人差指を鼻の下にもっていくと、どんな意味になりますか？
- 21 他人の家を訪ねたときに、玄関でどのように声をかけますか（オツカカ、イタカネー、オルカイ）？

## 5 おわりに

本稿で検討してきた結果を整理すると、日本文化の基層は9文化圏（1.アイヌ文化圏，2.ミズナラ帯文化圏，3.焼畑農業文化圏，4.餅なし正月文化圏，5.佐渡文化圏，6.照葉樹林文化圏，7.隼人文化圏，8.琉球文化圏，9.宮古・先島文化圏）に分けられる可能性のあることが判明し、先行論文の資料を検討する過程で、当面の結論として次の4点を得た。

- (1) 本方言の5大区画が「日本文化の小文化圏」に重なるわけではない。
- (2) 文化圏は、遺伝子・植物・歴史・出土品・習俗・方言などの基準を総合化して認定すべきである。
- (3) 紀元前1万3千年頃に渡来した民族による佐渡文化圏と宮古文化圏>移住・伝播してミズナラ帯を中心とする縄文人文化圏>他の文化圏との接触をほとんどもないアイヌ文化圏，宮古・先島文化圏ができる>山間部などで焼畑文化圏>餅なし正月圏が形成か，隼人文化圏の形成もこの頃か>西日本の照葉樹林帯を中心とする弥生人文化圏という伝播経路が推定される。
- (4) 日本文化の基層の上に住民の移動や時代による社会変化などが重なってきたので、現時点での小文化圏を確定するには、それを実証するための調査が必要である。

## 注

- (1) この調査は日本語方言基礎語彙に関する全国規模の調査であり、平澤も参加した。この実態調査から多くの言語事実が明らかになり、後に全国規模の調査を経て辞典にまとめられた。
- (2) 平澤洋一(2009)「日本文化の基層と境界線」『広島大学留学生センター紀要』第 18 号平成 21 年 3 月 31 日
- (3) 佐々木孝明(1993)『日本文化の基層を探る』NHK ブックス, 216 頁。
- (4) 同上 6-9 頁。
- (5) 宮城音弥(1977)『日本人の性格—県民性と歴史的人物』東京書籍。
- (6) 上記(2)に詳述した。
- (7) 松本秀雄(1992)『日本人は何処から来たか 血液型遺伝子から解く』NHK ブックス, 105-6, 176-7 頁。図 9 は同書 92 頁による。
- (8) 同上 107-8 頁。
- (9) 同上 208-9 頁。
- (10) 田中 琢・佐原 真(1993)『考古学の散歩道』岩波新書, 91~2, 179, 210~12 頁。